

六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りつか
chairman Yamada Rokko
secondary c, and the
editor in chief Kotori
cover designed by Little Bird

7月号

たん
丹

夏つばめ

山田六甲

だ 断^{だん}崖^{がい}の 罅^{ひだま}の中を 揚^あげ花^{はな}火^び
れ 冷水の中より 揚^あげし 西^{すい}瓜^かかな
が 瓦^が斯^す燈^{とう}に 当^あたりては 飛^ひぶ 火^ひ取^{とり}虫^{むし}
そ 早朝の 汗拭^{あせぬぎ}ひつつ 胡^き瓜^{ゆうり}もぐ
う 渦巻^{うずま}ける 夜^よ店^{みせ}灯^{あか}りの 金魚^{きんぎょ}かな
い 一等^{いちとう}を 引^ひかむ 夜店^{よみせ}の 宝^{たから}くじ
つ 突^つく 音^ねに 空^{そら}気^きの 音^ねも 心^{こころ}太^{てん}
た 束^{たば}解^といて 冷^{ひや}やし 素^{そう}麵^{めん}湯^ゆが ぎをり
か 蚊^かの 声^{こゑ}を 払^{はら}ふ 手^てで 灯^ひを 点^{とも}し けり

を 雄おすどり鶏どりを近づけぬなり羽はぬ拔け鶏どり

た 高くうつ草くさや矢やの戻り来たりけり

ず ズンと来る三尺さんじやく玉だまの揚たか花はな火か

ね ねずみ捕とる気もなき猫ねこの大暑たいしよかな

な 夏の蜂はち脚あしをぶらさげ巢ねに戻る

い 一いっ対たいの俄にわか弾はじける螢へいかな

で でで虫むしを睡蓮すいれんの葉はに移しけり

い 井いも守もり釣りるみみずを糸いとに括くりをり

わ 湾内わんないにをみなみなの漕こげる涼すずみ舟ふね

だ 団子出す冷やし置きたる餡あんからめ
れ 檸檬汁れもんじゅう垂たらして水を夏座敷なつざしき
が かなり呼ぶ沖へ泳ぎてゆける子を
そ 時ときつや夜の巖山いわやまの不ほと如と歸ぎ
う 萍うきくさに藻の花の寄りかかりたる
い 一斉に浮あき現あらわるる螢かな
つ つまみては夜濯よすすぐ絹の肌着かな
た 高々と雲の峰あり青田あおたか風
か 缶開けて注ぐ麦酒ビールの泡涼し

ををみなより美しく羅うすもの掛けてあり
 た叩きつけ庭石に割る水中すいちゆうか花
 ず図ずうたい体と言ふに似合へる昼寝かな
 ね寝間に聴く暁あかつきの雨涼しかり
 な波音や髪の毛の汗ばむ夜の褥しとね
 い活いき活きとしたる眼まなこに鮎あゆ売らる
 で電灯の色の重たく夏至げしの夜
 い勢せいひをつけて灼やけたる浜走る

青すぎる夜

貝森 光洋

雨蛙緑の便りに誘われ
失くせしは羽根のみならず羽拔鳥
青すぎる夜と蚯蚓は思いおり
で虫やここにもひとり淋しい子
郭公の合いの手入るヨサレ節

しがらみ

梶浦玲良子

倒立の少年の影みなみかぜ
別れたい別れたくない薄氷
消灯ラッパ春潮ふかく眠り落つ
たんぽぽの絮しがらみのなき軽さ
麦踏のうしろを通る日のあえぎ

雪 卿 集



黒縁啓鴨草
 光下蛰引の
 るのやい芽
 疎秘博ての
 水匿く物吊蓋
 のの館し形
 鯉酒の俣に
 ややのの縁
 水雛薄双取
 温の暗眼り
 む夜く鏡ぬ

鯉こい

松本文一郎

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

昼霞 ひるがすみ

K O K I A

両端の消えし架橋や昼霞

春光や人の動きにたつ埃

鮎子を炊くや粗目をこぼしつつ

あたたかや金の成る木に花満ちて

木蓮の日中に白を極めけり

春の雨

筒井八重子

陽光に眩しく桜散りにけり

入学児迎へる八分咲きの花

枕辺の一輪挿しに花愁

皿に盛る菜の花ひたし一人食ぶ

水の輪を数へて気づく春の雨

蛍雪譚 六甲

手に頬に風に消えゆきしやぼん玉 平居 滯子

シャボン玉の虹色は物に触れて壊れ、物に触れないシャボン玉は自ずと風に壊れて消えてゆく運命にあると感得しているのだ。しやこらん玉にはどこか無常観が漂っているのだ。

咲き満てる枝垂桜の中暗し 藤原 春子

満開の枝垂れ桜の内側に入ればそこは意外にも暗いのである。俳句は特殊性ではなく意外性をむねとすべしで、この句はそれに適っている。六甲の経験から実際の枝垂れ桜の内側はまことに掲句のとおりでなのである。

地面までしだれ桜の飛沫きけり 田尻 勝子

「飛沫きけり」が良い。飛沫のようだと言えはこの句は弱くなり、「飛沫きけり」と言い切ったところに主観による写生表現があり力強くなる。俳句の比喻では「ごとし」と逃げてはいけない場合がある。そのような場合の比喻は掲句を手本とするよう心得るべし。

六花集

六甲選

平居 滯子

滝と塔重なる熊野花ざかり
われもまた桜の下に立ち止る
花吹雪浴びて高嶺へ第一歩
手に頬に風に消えゆきしやぼん玉
春眠のやましき夢より覚め難し

藤原 春子

咲き満てる枝垂桜の中暗し
山こぶし水面にうつり咲きにけり
あちこちに馬酔木の花の咲きにほふ
桜薬降りて地面の暮れにけり
印南の平野の春を惜しみけり